

宇野浩二童話「王様の嘆き」にみるハインリツヒ・ハイネ「ロマンツェロ」受容

増田周子

宇野浩二は、小説家であったが、童話にも大変興味を持っていて、二百編にもものぼる童話を発表している。⁽¹⁾創作童話から、欧米、朝鮮、日本の民話などは勿論、話題になった話や小耳に挟んだ話、自分の読んだものなど何でもフィクション化して童話にしてしまう。ちょうど彼の小説の手法と同じである。

また、拙稿「宇野浩二未発表書簡二十八通―竹村坦宛書簡十六通・加藤朝鳥宛三通・加藤寿々子宛一通・福永渙宛一通・石村一郎宛三通・大江勤宛一通・小川正夫宛一通・宮西豊逸宛一通・矢倉年宛一通」⁽²⁾で紹介したことがあるが、坪田讓治の「風の中の子供」を文芸懇話会賞の受賞作に推薦しようと奔走、努力したり、雑誌の子供達の作品の選者になったりするなど童話や子ども達をこよなく愛していることがわかる。若い時に多くの童話を書いているせいか、生活のためだと思われがちであるが、決してそうではない。昭和六年『赤い鳥』復刊をめざし、

編集記者となった与田準一は、解説（『新日本少年少女文学全集 21 宇野浩二集』昭和34年12月30日 ポプラ社）で、次のように述べている。

「赤い鳥」の童話は、昭和期にはいつてから、ぜんたいとしては文学的に高まりながら、その題材なり話の内容に興味性がたりない、なんとかして、おもしろい、子どもにじかにしたしめる作品がほしい、それには、宇野童話が、まちがいなくおもしろい、こういうことで、原稿依頼の使者と、私はなったのだったようにおぼえております。

（中略）そのとき、書いてもらった『王様と靴直し』は、復刊第一号をかざりました。この作とあわせて、「赤い鳥」に出た宇野先生の童話は、すべてで二十七編になり、同誌寄稿作家の中でも、主宰鈴木三重吉、小川未明、坪田讓治の諸家について、多作のほうにはいるのです。そのうえ、

宇野先生の、少年少女のための作は、「少女の友」、「幼年クラブ」、「少年クラブ」、「少女クラブ」その他の少年少女雑誌に発表され、そのかずは、「赤い鳥」に発表されたものの数倍にあたるのではないかと想像されます。そして、注目されることは、「赤い鳥」とは発行主旨を異にする、いわば商業主義の児童雑誌に発表された童話作品と、「赤い鳥」に発表された作品とのあいだに、そのできぐあいにおいても、作家態度においても、少しもわけへだてが見られない、ということでありましょう。終始、だれにもわかりやすい文体で、子どもとともに、たのしんで語る態度、といいましようか、一見、平易な、物語性のある話のなかに、しかし、宇野文学でなければ見られない、独特の世界がくりひろげられます。

小説でも童話でも、宇野浩二がいつも真摯な態度で筆をとる姿が窺える。

本稿では、大正十一年七月一日『赤い鳥』（第9巻1号）に発表された「王様の嘆き」について検討していきたい。まず初出発表誌と宇野浩二存命中に収録された本とそのタイトルを挙げてみる。

① 王様の嘆き（『赤い鳥』大正11年7月1日 第9巻1号）

- ② 王様の嘆き（『赤い部屋』初収 大正12年2月15日 天佑社）
- ③ 王様の嘆き（『春を告げる鳥』昭和2年3月25日 大日本雄弁会講談社）
- ④ 王様の嘆き（『天と地の出来事』春陽堂少年文庫）30 昭和7年11月1日 春陽堂）
- ⑤ 王様と学者（『児童と家庭』昭和10年2月1日 第2巻2月号）
- ⑥ 王様の嘆き（『宇野浩二集』新撰童話』昭和13年12月15日 湯川弘文社）
- ⑦ 王様の嘆き（『新イソップ物語』昭和14年4月3日 中央公論社）
- ⑧ 王様の嘆き（『聞きたがり屋』昭和16年6月25日 時代社）
- ⑨ 王様の嘆き（『龍介の天上』昭和21年4月20日 弘文社）
- ⑩ 王様のなげき（『宇野浩二童話名作選』昭和22年3月15日 羽田書店）
- ⑪ 王様のなげき（『話を買う話』日本童話名作選』昭和22年11月20日 光文社）
- ⑫ 王さまの嘆き（『王さまの嘆き』昭和23年5月25日 〈あおぞら文庫〉国民学芸社）

⑬ 王さまのなげき〔『ふきの下の神様』昭和23年12月5日 童話春秋社〕

⑭ 王さまのなげき〔『海の夢山の夢』日本童話小説文庫〕7 昭和25年2月15日 小峰書店〕

⑮ 王様のなげき〔『日本児童文学大系2』昭和30年8月30日 三一書房〕

⑯ 王様の嘆き〔『菊池寛・宇野浩二集』少年少女のための現代日本文学全集14〕昭和30年12月24日 東西文明社〕

⑰ 王さまのなげき〔『宇野浩二集』新日本少年少女文学全集21〕昭和34年12月30日 ポプラ社〕

十七冊の本を一見してわかる形式的な相違をあげてみる。まずは、タイトルの相違である。⑤だけは「王様と学者」というタイトルである。他は子どももの年齢にあわせて、タイトルを「王様の嘆き」「王様のなげき」「王さまの嘆き」「王さまのなげき」などとしている。また、⑤は、章立てがされていないが、⑤以外は、全体が三章仕立てになっていて、一、二、三と記されている。初出雑誌①の末尾には「―ハイネの物語詩より―」とあり、⑤には、「(これはハイネの『詩人フィルドウシ』といふ詩を元にして書きました。筆者)」とある。①と⑤以外は、末尾には何も記載されていない。

では、宇野浩二が末尾に付加した「―ハイネの物語詩より―」とか「ハイネの『詩人フィルドウシ』といふ詩」とは一体何をさすのであろうか。「詩人フィルドウシ」はハイネの「Roman-zero」という物語詩の中に存在する。生田春月訳『ハイネ全集第二巻』(大正9年12月6日 越山堂)の「邦訳者解題」に

『ロマンツエロ』は一八五一年十月出版せられたハイネの第三詩集である。そしてハイネの最も円熟したる時期、その詩人としての最高頂を示すものである。然しこれ等の比較を絶する雄篇を草した時、詩人は痛ましい病臥の人であった。彼の世俗の児としての幸福な時期は既に失つた。(中略)

また『時事詩集』に於て最も顕著であつた、あの諷刺的、嘲笑的な才能はより鋭く、より深くなつて、毒矢の如き効果を齎らさずには措かない。

と述べている。

まずは、宇野浩二とハイネとの関わりについて述べてみたい。宇野浩二は『青春の文学』昭和24年5月25日 文潮社)で次のように述べている。

私が、西欧の詩人のなかで、もつともはやくしつて、私もはやくしたしみをおぼえたのは、ハイネである。このこ

ともたびたび書いたが、それは尾上柴舟の訳である。いま、その本をあらためて見ると、その奥附に、明治三十四年十一月十五日、著作者 尾上八郎 発行者 佐藤義助、発行所 新声社、とある。いふまでもなく、新声社はいまの新潮社の前身であり、佐藤義助は、いまの新潮社長、佐藤義亮であらう。

ところで、私が、この本をはじめて読んだのは、明治三十八九年、十五六歳のころである。

宇野浩二は、尾上柴舟の『ハイネノ詩』（明治34年11月15日新声社）によってハイネを知り、「中之島の図書館にかよつて、英訳でハイネを読みふけた」という。そして『青春の文学』（前出）で、『ハイネノ詩』（前出）の冒頭の「おもかげ」という詩の尾上柴舟訳（文語調）、英訳のもの、生田春月訳（口語調）を並べている。日夏耿之介の「この詩の一般的好尚をひくゆえんは、このわかりよい平凡なリズム」であり、「柴舟訳本ハイネは当代文学青年男女にもつとも喜ばれた愛読書であつた」という言葉を借り、宇野をはじめ、文学青年にハイネの詩の抒情性が特に人気であつたことを説明している。

ここで日本におけるハイネの受容過程をみてみよう。

『生誕200年 ハイインリッヒ・ハイネ展』（1997年9月29日

丸善プラネット株式会社）には、日本最初のハイネの翻訳は明治二十二年八月の森鷗外「あまをとめ」で、明治三十四年十一月、尾上柴舟の訳詩集『ハイネノ詩』により、「ハイネを、涙の抒情詩人として受け取る土壌が出来上がっていった」とある。ついで明治三十六年橋本青雨が『詩人ハイネ』を著し、高山樗牛は「わがそでの記」（明治30年）「思ひ出の記」（明治34年）などにハイネを抱いて涙した自分の姿を描いている。しかし明治二十七年田岡嶺雲は、「ハイネを単に感傷の詩人としてではなく、闘う詩人、人間解放のヒューマニストとして把握し、紹介した。

大正時代から昭和の初期にかけて、ハイネをよく研究し、ハイネの社会主義的側面をも、広く日本に紹介したのは、詩人であり、評論家でもあつた生田春月（1892—1930）であつた。春月は既に大正初期からハイネの詩を訳し始め、口語で原作を捉え、ハイネの時事詩ないし社会詩も訳出して世に紹介した。彼のハイネ訳詩集は当時の、民主化運動とも相俟つて、愛読されたものである。

（『生誕200年 ハイインリッヒ・ハイネ展』前出）

日本におけるハイネの詩、評論、回想記などの翻訳紹介は、明治時代から盛んであつたが、生田春月訳ハイネは、大正期に

はかなりブームになったようだ。また物語詩 叙事詩など全貌を見渡せるようなものは、生田春月が最初に訳したのではないかと推測される。

国立国会図書館編の『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（昭和34年9月25日 風間書房）にも物語詩（ロマンツェロ Roman-nas）は生田春月『ハイネ全集第二巻』（大正9年12月6日 越山堂）以前には全く見当たらない。⁽³⁾ 鈴木和子「日本におけるハイネ文献―明治・大正時代―」（『ハイネ―比較文学的探求―』昭和50年6月10日 吾妻書房）でも同様であった。したがって宇野浩二は、この生田春月訳ロマンツェロを参考にしたか、英訳本を参考として「王様の嘆き」を書いたのではなからうか。先に紹介した「おもかげ」でも尾上柴舟訳、英訳本、生田春月訳のものを列挙していることから、宇野浩二は英訳本を読んだか、春月訳のものを典拠としたに相違ない。

「詩人フェルドウシ」は、生田春月訳『ハイネ全集第二巻』（前出）の「ロマンツェロ 第一巻 史伝」中に、「チャアルズ一世」「マリイ・アントアネット」「リチャード王」その他多数の物語詩とともに、「詩人フィルツウジ」というタイトルで確かに存在している。それは、三章構成で、二でフェルドウシの言い分を述べるなど、宇野浩二の「王様の嘆き」と一致している。

宇野浩二が通い詰めてハイネの英訳版を読み耽ったという大阪府立図書館には、『THE POEMS OF HEINE』（EDGAR ALFRED BOWRING, C. B. 1601年 GEORGE BELL & SONS LONDON）という本があった。その本の「ROMANCIERO」に「The POET-FERDUSI」がある。この英訳本も、生田春月訳も、検討するとほぼ内容が同じで、三章仕立てになっている。そこで、ほとんどハイネの原典を生かしていることがわかる。

宇野浩二は『文学の三十年』（昭和22年5月20日 中央公論社）で、次のように記している。

私をはじめて春月を知つたのは、大正五六年頃で、布施延雄（註―私と早稲田文科の同級で、いくつかの翻訳を出した。）という春月の親友につれられて、榎町の春月の家を訪ねた時である。（中略）私は春月に親しみが持てさうで、親しみが持てなかつたので、その頃二三度たづねただけで、その後春月と交際らしい交際をしなかつた。ただ、大正六年頃、中学時代から愛読してゐたのと、生活費を取るために、ハイネの詩集を、英訳を主として、翻訳した時、私は、春月に、序文を書いてもらった。（中略）私のハイネの訳詩集の印税内金として、原稿と引き換えに、約束手形で、金をくれたが、それが不わたりになつたので、私は、

その原稿を、取り返した。それで、私のハイネの訳詩集は世に出なかつた。その頃のことを春月が書いてゐるから、気が差すけれど、うつしてみよう。

宇野浩二君の文学の愛も驚くべきものだ。殊に、彼がいかに詩を熱愛してゐるかは、多くの人の知らないところだらう。十年前、彼が、布施延雄君とともに、自分の『靈魂の秋』を愛してくれた事を自分は忘れえない。彼はハイネの詩集をも訳した。自分はそれに序文を書いたが、あの訳稿が世に出ないでしまつた事は非常に残念に思ふ。

このことから、宇野浩二が生田春月のハイネ訳を読んでいた可能性は極めて高いし、先にあげた英訳本とも生田春月訳は内容がほぼ同じなので、ここからは、生田春月訳をもとに考察を進めていきたい。

宇野浩二の童話とハイネの詩との内容の違いについて簡単に記す。ハイネは、地名や人名などをイランの国だとか、フェルドウシがファルジスタンの『王候伝』の著者であることや、王様の名はマホメットであるなど、具体的に述べている点に特徴がある。タイトルを見ると、ハイネの詩が詩人フェルドウシの生き方を記した伝記的な詩であるのがわかる。それに対し、宇

野浩二は、童話として描く時に、「王様の嘆き」を中心とした王様の後悔話を中心に仕上げている。また、ハイネは十七年の歳月の経過を「十七度薔薇は花咲いた／十七度薔薇は散つて行つた／夜鶯は薔薇を歌つた十七度／夜鶯は声を収めた十七度——」（生田春月訳・前出）と薔薇と夜鶯で表現しているのを、宇野は桜の花、木の葉、燕と雁などと日本の風物に置き換え、日本の子どもにわかりやすいようにしている。洪川驍は、「ハイネはその物語詩において、宮中の光景に力点をおいているので、全体として華美な面が表面に出ているが、宇野のほうは、この宮中の光景には注意を払っていないので、いっそうしんみりした感じが強くなっている」（『宇野浩二論』前出）と述べるが、宇野浩二の童話にも宮中の様子は描かれているので、一概に洪川驍の言うようにはいえない。宇野浩二の童話もハイネの詩をかなり参考にしている。

洪川驍は、フェルドウシについて、宇野浩二の「童話に書かれたのとだいたい同じ生活を送った人」（『宇野浩二論』前出）というので、フェルドウシについて調べてみた。『新イスラム事典』（2002年3月11日発行、平凡社）で、黒柳恒男は次のように記している。

フェルドウシー「Firdawsi」934～1025イラン最

大の民族叙事詩人。イラン東部のトゥースの地主の家に生まれ、980年ころ、イスラム以前のイランの神話、伝説、歴史を主題としてペルシア語で《シャール・ナーメ》の作詩に着手し、約30年かけて、1010年に約6万対句からなる大作を完成し、ガズナ朝スルタン・マフムードに捧げたが報いられず、失意のうちに郷里で没した（以下略）

《シャール・ナーメ》は「王たちの書」の意味で、生田春月は、「王侯伝」と訳している。現在、我国ではフィルドゥスイー作『王書』（岡田恵美子訳1999年4月16日 岩波書店）という訳語で定着している。

フェルドゥシの生涯については、十二世紀半ばにニザール・ミー・アルズイー著『逸話集』⁽⁴⁾（通称『四つの講話』詩人）中の「第九話フィルドゥスイーとスルタン・マハムード」に詳述されている。内容をかいつまんで述べる。フィルドゥスイーはトゥースの地主で、裕福に暮らしていた。彼には娘が一人あり、二十五年かけて書いた『王書』の報酬を娘の持参金にしようと思っていた。完成した『王書』（筆耕者アリー・ダイラム朗誦者 アビー・ドゥラフ）を宰相を通じてスルタン・マハムードに差し出すが、彼はフィルドゥスイーが異端の徒であるという周囲の者の言を聞きいれ、二万ディルハムを下賜しただけで

あった。落胆した彼はビールを飲み、風呂に入る。そして風呂屋と酒屋にその銀貨を分け与えた。マハムードが自分を処刑することを恐れ、逃亡したフィルドゥスイーは、タベリストーン王シャハリヤールのもとに行く。そこでフィルドゥスイーはマハムードの風刺詩を書くが、シャハリヤールは十万ディルハムで買取り、事なきを得た。ある時、マハムードがインドからガズナに帰還する途中で、謀反がおきた。そのとき宰相が詠んだ『王書』の句に、マハムードはフィルドゥスイーを思い出し、「六万ディナールに値する藍を王の駱駝で運ばせ、許しを求めよ」と命令する。駱駝がタバラーンの町に入ったとき、反対の門からは、フィルドゥスイーの棺が運び出されていた。彼の娘はスルトンの恩賞を受け取らず、その金でチャーハの休息所が修復された。というような話である。現在でもイランにはフェルドゥシ病院、フェルドゥシ通りなど、フェルドゥシを冠したものが沢山あって、皆に親しまれ、尊敬されている。

作者ニザール・ミーは、十二世紀初め頃から、流麗なリズムで語られる詩を聞きながら、イラン各地を旅した。フィルドゥスイーの墓にも詣で、この作品を書いたという。ハイネがこれを読んだかどうかは不明であるが、「詩人フィルドゥシ」に大変よく似ている。細部にわたっては次のような相違点が見られる。

ニザミー	ハイネ (生田春月訳)
フィルドウスイー自らの意志で書いた	フェルヅウシが王の命で「王書」を書いた
完成に二十五年かかる	完成に十七年かかる
異端の徒であるから	言葉の二重の意味を利用した
王が苦境の時「王書」の句で勇気づけられ、フィルドウシを思い出す	朗誦する美しい歌声でフィルドウシを思い出す
六万ディナールの藍を送り許しを求める	全国の租税にもあたる品々を贈り、挨拶をする

『王書』(前出)の中には三十年の歳月をかけて完成したとも書いてあるようだが、なぜハイネは十七年にしたのかいろいろと疑問な点が多いが、宇野浩二の「王様の嘆き」は、ハイネの詩にある十七年としている。

ここで宇野浩二の童話に話をもどそう。渋川驍『宇野浩二論』(昭和49年8月30日 中央公論社)に次のようにある。

宇野浩二の「日記」の昭和七年四月五日の上欄に「ハイネの『フェルドウシ』をしようと思ふ。四十行から六十行。」とあるので、この童話はハイネのこの作品によつた⁽⁵⁾

ものであることがわかる。しかし、「王様の嘆き」はすでに十年前に発表されたものであるから、この「日記」の文句は、その童話の不満なところを少し書き直そうという意味ではないかと考えられる。

そこで①、②、③と、宇野浩二の「日記」の日付に最も近い④の昭和七年十一月一日発行の春陽堂少年文庫版「王様の嘆き」との変更箇所を調べた。「せつせと」が「せつせと」、「擔いでゐます」が「擔いで来ます」、「家来」が「家来たち」だとか、語尾のちよつとした変化、感嘆符、疑問符、読点がついたりつかなかつたり、などの相違がある程度でほとんど異同はない。このことから、渋川驍の推測はすこしはずれているように思える。

昭和七年当時の宇野浩二は、病氣回復期で、長い間頼まれていた原稿「枯木のある風景」の執筆に四苦八苦ししていた時期であった。だから、とてもそんな書き直しの余裕もなかつたらうし、最後まで童話に手を入れてはいないので、書き直す必要も感じていなかったと言える。

では、日記に書かれた「四十行から六十行」は、何を意味するのだろうか。昭和十年二月一日発行の⑤の掲載雑誌『児童と家庭』は童話本でも子ども向けの雑誌でもない。内容は中学校

受験準備の記事が多く掲載されており、小学校教師もしくは受験生を持つ親のための雑誌といえる。これは「王様の嘆き」収録本十七冊のうちのただ一冊だけである。従って童話であっても、子どもが読むのではなく、教師や親が読んで消化し、子どもに話を聞かせるためのもののようなものである。本文の長さも⑤だけは四〇〇字詰原稿用紙約五枚半、他は全ておよそ十五枚位である。しかも、⑤は『児童と家庭』の組み方によると、行数にして五十から五十数行に当たる。こう考えていくと、もしかしたら宇野浩二は、早い時期からこの雑誌に、四十から六十行程度の童話を書くことを依頼されていたのではないだろうか。頭の片隅にそれが浮かび、忘れないように日記の上欄に書き留めていたのだろう。だから、章立てをする必要もなかったのである。だからといって、この「王様と学者」は他の「王様の嘆き」に比して全然遜色なく、よい作品であることは言うまでもない。

「王様の嘆き」というタイトルの場合、王様の後悔や反省などが色濃く出ていて、子供に善い方向付けをする描き方が感じられる。「王様と学者」というタイトルにすると、王様にスポットを当てて読んでも学者にスポットを当てて読んでもどちらでもかまわないような描き方になっている。人間の運命の皮

肉さや、王様でさえままならない人生、学者の生き様など、大人として読む場合は、単なる教訓ではなく人間の生き方を色々な角度で読み取って貰いたいという意図があつたのではないか。なお、この⑤「王様と学者」以降の、⑥～⑰までの本は全て、①～④にみられる程度の本文異同で、①の「赤い鳥」発表の本文を踏襲している。

宇野浩二が、ハイネの「詩人フェルドウシ」という詩に何故興味を持ったのかを探る上で興味深い発言がある。十返肇は、「解説」(『少年少女のための現代日本文学全集』昭和30年12月20日 東西文明社)で次のように記している。

宇野氏は子供むきの童話だからといって、いいかげんな「子供だまし」の話を書くような作家ではありません。たとえば、ここにおさめられている『王様の嘆き』を読めば、そのことがわかるとおもいます。

お金の種類が金貨と銀貨の二とおりしかなく、そのいずれもがトオマンというのをよいことにして、王様は学者をだまします。学者は十七年もかかって、王様にたのまれた歴史の本を書きます。そして銀貨のトオマンしかもらえなかつたので、ガツカリします。しかし、そのとき学者のフェルドウシは、つぎのようにいいます。「自分は、べつに

商人でないから金貨でも銀貨でもいい。しかし、トオマンが二とおりあるのを種にして人をだますようなことをするのがいやなのだ」と。

私は、さきに学者が、銀貨のトオマンばかりであったので、ガツカリしたと言いましたが、言い直さなくてはなりません。かれがガツカリしたのは、王様のひきょうななさりかたであったのです。この学者が、「自分は商人だから金貨でも銀貨でもよい、くれなくてもいい」という、そのことは、学者のみならず、芸術家の心意を示したものであります。いや、文学者宇野浩二の文学にたいする心意を示したものと、私は承りたいと思うのです。

文学者の喜びとは、小説を書いて、それがお金になることにあるではありません。すべて芸術家の喜びとは、仕事にうちこむそのこと自体のなかにあります。したがって、自分でも気に入った仕事ができることこそ、芸術家にとつて、もっとも大きい報酬でなければなりません。近ごろは、お金をもうけるのが目的のような「芸術家」もいるようですが、それはほんとうの芸術家とはいえません。自分の仕事である芸術をほんとうに愛しているならば、芸術家の喜びや報酬は、仕事をはなれてあるわけはありません。

ん。そして、宇野浩二氏は、まさしく、そういう純粹な芸術家のひとりです。現代に非常に数少なくなつた芸術家のひとりであります。私が学者のことばを、宇野氏の氣持として受けとりたいゆゑんであります。

宇野浩二はハイネの「詩人フェルドウシ」から、フェルドウシという実在する詩人であり学者である人物を知り、自分とおなじ芸術家としての姿を重ね合わせ、共感を覚えた。そして、そのことが、宇野浩二に「王様の嘆き」という童話を書かせるに至つたのかもしれない。

注

(1) 拙稿「宇野浩二童話目録」(『宇野浩二書誌的研究』平成12年6月20日 和泉書院) 参照

(2) 『関西大学文学論集』(平成18年10月25日 関西大学文学会)

(3) 詩そのものの訳はないが、藤浪木処『ハイネ評伝』(大正5年11月16日 洛陽堂)などに、フェルドウシや、「Romanzero」を紹介している。

(4) 黒柳恒夫訳『ペルシア逸話集(東洋文庫)』(昭和44年3月10日 平凡社)

(5) 日本近代文学館編『文学者の日記7 宇野浩二(2)』(平成12年8月31日 博文館新社)には、「ハイネの『フェルドゥシ』をちらと見る。四十行から六十行」となっている。

本稿は平成十八年度科研費補助金(課題番号17520178)の助成を受けた。深く感謝申し上げます。

(ますだ ちかこ/本学助教授)